

自動車メーカー
技術者への提言

モータージャーナリスト、レーシングドライバー、そしてチューナーと多方面で活躍する太田哲也が、世の中に自らのオビニオンを直球で発信し世相を斬る「オレの話を聞け!」。第2回は、若者のクルマ離れはなぜ起きたのか? そしてその対策は? 解決の糸口をつかめない自動車メーカーに向け、太田哲也が持論を展開し明るいクルマの未来を提案する。

TEXT ●太田哲也 (Tetsuya Ota)
PHOTO ●KEEP ON RACING
<http://www.keep-on-racing.com>

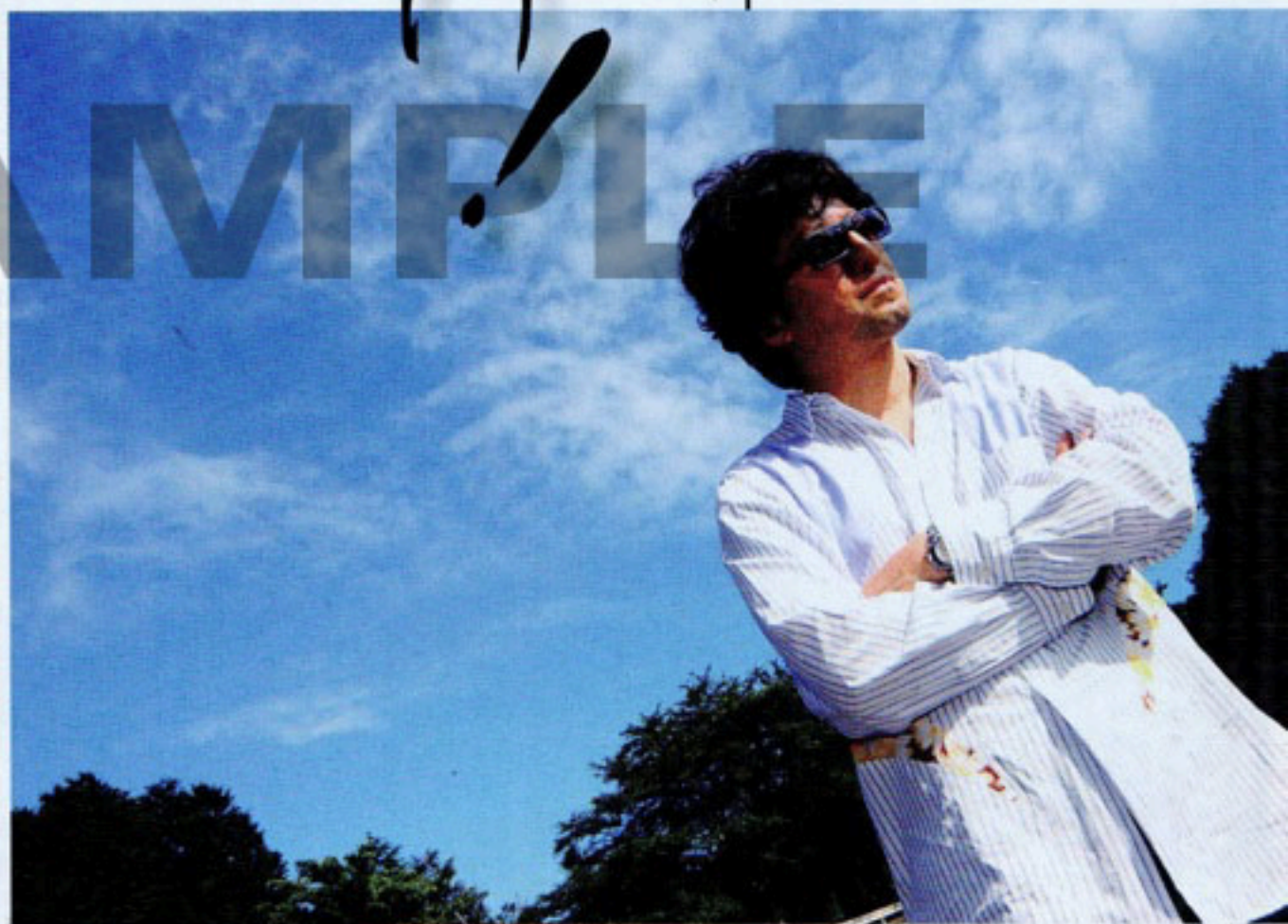
太田哲也の
オレの話を聞け!

経 産省の知人からの依頼で自動車メーカーと大手部品メーカーの若手技術者有志による勉強会の講師として話すこととなった。主催者から「意見をガツンと言ってください」と言われて話してきた。事前に彼らは「若者のクルマ離れは本当に起こっているのか?」とい

うテーマで、5グループに分かれてそれぞれ街に出てアンケート調査を行った。結論としては、意外なことに若者であっても概ねクルマの社会的な必要性については理解した意見が多かったようだ。ただ自分たちには今のところ必要がない。

地域性も考える必要があるだろう。東京では駐車場代が減法高いし、だいたい公共交通機関で事足りる。一方、地方ではクルマは生活必需品だ。オレ自身、昨年松島に行つて海岸線の仙石線(仙台〜石巻間)再開の目処が立っていないことを目の当たりにし、改めて今後もクルマの必要性は失われまいと感じた。

ではなぜ若者のクルマ離れが喧伝されるのか。クルマ業界が直面する厳しい現状に対してどのような手段を講じたらよいのか? そんなテーマに関連した質問を紹介しよう。



Q 自動車メーカー技術者
「太田さんがここ数年小学校出張授業に行つて、子どものクルマ離れはそんなになかったと聞いて少し安心しましたが、どんな話をしてどんな反応ですか?」

オレはクルマに一年間、乗れない時期があつて、そのときに改めてクルマの魅力を知った。事故の後遺症で長い距離は歩けないけど、クルマがあれば好きなきにどこにでも行ける。クルマはオレにとって、ルフィー(ワンピース)のゴムゴムの実なんだ。手足がグングン伸びてできることが広がる。そういう話をする子どもたちは歓声を上げる。それ

から君たち、大きくなったらクルマに乗ろうね、というときみんな大きくなずいてくれる。

その後の質問コーナーではクルマの質問がいっぱい出る。女の子から「免許を取るにはいくらかかるんですか?」とか、「ボクはランボルギーニの方が好きです」「GT-Rとスカイラインの違いは?」などなど。校庭ではオレが乗ってきたクルマを興味深々に見て「すごいタイヤが太い!」「車高が低い」と驚いている。校長先生から聞いた話だけど、クルマを見た男子から「このクルマのこのとを調べてみます」と言われたそう。その子は野球にしか興味がなく

て他のことに興味を持ったのは先生としては意外だったそうだ。

多分これがミニバンやエコカーだったらこういう反応にはならないんじゃないかな。彼らが反応しているのは「無駄な要素」、つまり便利な道具以外の要素というかエモーションな箇所じゃないだろうか。冷蔵庫や洗濯機に関心を持たないように今の彼ら彼女らにとってそうしたクルマはあたりまえの道具だ。関心を寄せなくて当然だよな。

ところで今の子ども



小学校への出張授業は太田哲也にとってライフワークのひとつで、そこで子どもたちのリアルな反応を得ている。そこから「クルマ離れ」が単純ではないことを感じている。

どもたちは音楽やファッションなどの文化要素やサブカルチャーには強く関心を寄せている。俺たちの時代はクルマがそうだったけど、今多くのクルマがミニバンに動く四畳半、コンパクトカーに燃費がよくて便利な箱で、それでは感情は揺すぶられないだろう。その辺がわかると、クルマ好きを増やすヒントがあると思う。



様々な団体や企業から講演依頼があるが、今回は自動車関連メーカーの若手技術者に「クルマ離れ」の是非や現状などを、自身の経験を踏まえて伝えた。



カーライフの安全性向上を目指し、積極的にスクールを開催している。ドライビングスクールを通じてクルマ文化を日本に根づかせるのが太田哲也の目的のひとつだ。

Q 自動車メーカー技術者

「フェラーリにあこがれてメーカーに入って技術者になりましたが、やっぱり日本にはモータースポーツやクルマ文化は難しいのかなと感じるようになりました。根付かせることはできると思いますか？」

「モータースポーツが根付かないのは日本には底辺がないからだと思ってる。ヨトロッパでレースをやってみて、日本人でもプロ同士は引けを取らないって感じたけど、アマチュア層の厚さと言ったら、計理士や会社役員

バルBRZも出てきたことだし、参加型モータースポーツ文化が拡大するチャンスかもよ。インポートカーメーカーも期待しているよ。」

Q 自動車メーカー技術者

「父親の影響でクルマ好きになったけど、所有するのは大変で、カーシェアリングとかの方が安く済むし、それでもいいんじゃないかと思ってしまうこともあります」

自動車メーカーの人間がそんなこと言ったら、会社が困るんじゃないの？(笑)。まあ確かに道具としてみたら所有する喜びは薄いだろうね。こういう時代だと生活必需品に対して財布のひもが固くなりがちだね。でも趣味とか好きなこととか、あるいは女性だったら旅行とかホテルとかだと、要するに生活必需品以外だと「別腹」で、財布のひもは緩むものじゃないかな。だからクルマを売るためには生活必需品としてだけではなくて、もっと人生に彩りを加える思い出だったり、喜びだったり、つまりエモーショナルな要素がクルマにあることを伝えたらどうかな。

Q 自動車メーカー技術者

「ボクは実はクルマ好きではないんです。どうやったら好きになれるのかなあ、好きにならなくてもいいのかなとも思います」

君みたいな人が自動車メーカーに勤めるようになったからつまらないクルマが出るようになったんだね、っていうのは冗談だけど(笑)、結局クルマって「モノ」で、人が「モノ」に対していいなと思うときは、実はその「モノ」ではなくて、それを作った人の考えや精神、価値観に共感しているということなんだ。だからクルマを好きになりたかったら人に興味を持つことから始めたらいい。オレがブランクをおいてまたクルマに乗るようになったとき、自動車メ



様々な意見と質問、そして感想が飛び交った勉強会。日本の自動車業界が少しでも現在の閉塞状態から抜け出し、新たな方向性を探るための一助になれば幸いです。



「世界でいちばん乗りたいたい車」という本を書いたんだけど、そのときはまったく浦島太郎状態でゼロからのスタートだよ。でもクルマに乗ることで、5年の歳月の中で変化したユーザーの価値観や開発者の考え方、本当はこんなものを作ってたかっただけこんな風になってしまったという失敗もあれば意欲も見えてくる。また生まれ出た必然性などのストーリーに目を向けるとクルマを通していろんな世界が見えてきた。そういう観点からクルマをとらえたらきつと好きになると思うよ。やっぱり自動車メーカーの作り手がクルマのよさを知っていないとね、大事だと思えます」

Q 自動車サブライヤー技術者

「技術開発だけでなく文化価値の開発も大切だということがお話を聞いてわかりましたが、今の段階(若いうちは)では技術のみ集中でよいでしょうか、それとも文化にも目を向けるべきでしょうか？」

この会社にはドラムセットとかあって、ここで社員が演奏とかやるわけでしょう？ 会社が文化要素を許してくれる気持ちがあるのに、技術一辺倒じゃあもったいないんじゃない？ 50歳になったらやろうと思っ

ていても人っていつも同じ空気を吸っているとその価値観に染まってしまふもの。突き詰めていくのは大事だけど外の空気を吸うのも大事だと思ってる。文化価値が必要と思ってるのは今でしょ。

Q 自動車メーカー社員

「ボクが今担当しているのは新興国のクルマで、彼らに生活の必需品としての技術を提供したいと思ってるんですけど、それでも文化は必要でしょうか？」

進興国と先進国とは分けて考える必要があるかもしれないね。エモーショナルや文化開発の提案は、成熟した先進国に当てる要素かもしれない。新興国ではまずは生活を豊かにしてくれる必需品が先だろうね。でもインドネシアではピックアップトラックのラリーがもう始まっているらしい。5年もすると世の中すぐ変わるものだよ。技術だけを積み上げればいい期間は、意外と短いんじゃないかな。

そもそもこれは会社勤めの人には言いにくいけど、みんなは40、50にはまだまだならないと思ってるだろうけど、50歳なんてすぐなっちゃうんだ。オレなんてこの前まで高校生だったのにもう50を過ぎていく。今に集中することも大事だけど、人生設計として自分が50になったらどうしているか、どんな考えを持った人間になりたいのかを今から少しは考えることも大事だよ。人間って10年も20年も同じことをやってるとそこでの価値観こそが正義になってしまいがち。とくに技術者は専門性が高いからこそ、広い視点を持つ努力が必要だと思う。プロドライバーだってヨーロッパ人は、いつも世界経済やマーケットの動向を見ているんだ。そうでなければポツと出はできても、長く継続してやっていくことはできない。

今の世の中は燃費を求めている、うちの会社はコスト削減を求めている、そういう一辺倒の情報を鵜呑みにしないで、それ以外にも大事な面があるのではと、自分の目で多角的に見ていくべきだと思うね。

近況報告

毎回参加者が殺到して好評を博している太田哲也氏主催のスクール「Tetsuya Ota ENJOY & SAFETY DRIVING LESSON supported by 出光」。その次開催は、6月15日(土)の袖ヶ浦フォレスト・レースウェイを予定。安全にクルマの楽しさを味わえるこのスクールは、「安全、楽しく、学ぶ」「カーライフの安全性向上」を目指すもの。興味のある人は<http://sports.driving.jp/>までアクセスを。